

# 日本人の自我と家族関係の心理学的考察

——「もらい子妄想」について——

山 添 正

## はじめに

筆者は、大学院の頃、病院で「自宅までの地図を画いて下さい」というこちらの注文に、どうしても自分の家までの地図を画けない患者さんに会った事があった。何枚地図を画いても、どうしても自分の家の一画は画けないというのです。本人も不思議がっているが、筆者が見ているとそれは「自分で画こうとしない」ような印象を受けた。私は、なぜこの患者が自分の家の存在を否定しなければならないのか不思議に思った。しかし、今思うと大変残念だが、その時はそれ以上の興味を抱かなかった。なぜなら筆者の関心はもっぱら自閉症の治療法に向かっており、日本人の自我のありかたと家族との関係についてと言うような比較文化的問題意識がその時はなかったからである。その患者に対する担当の精神科医の診断は精神分裂病だった。

この患者さんが「来歴（家族）拒否症候群」と呼ばれるカテゴリーに入ることは木村敏の現象学的人間学の立場を取る精神病理学の勉強をした時に知った。木村の論文には全く驚いてしまった。なぜなら、筆者がそれまで考えてきた事がほとんど彼の理論に既に語られてしまっていたからである。もう「もらい子」の研究の余地がないと思われるほどショックを受けた。ただ、「しつけ」とか「文化」と「もらい子」の関係について発達心理学的にまだ筆者の研究の余地があると思いなおし、「もらい子妄想」ではなく「もらい子空想」として筆者の研究を継続しており、結果は後日発表したいと思っている。

ところで、また発達心理学で「ファミリー・ロマンス」と言う言葉を精神分析学者が使用していること知り、またユング心理学の勉強を始めて昔話を研究

するようになり「継子」の話に、前述した患者の心理と共通したものがあることに気づくようになった。さらに留学して、ヨーロッパ人にこうした妄想や空想が少ない事を知り、改めて日本で調査したところ「もらい子空想」は大変一般的である事が分った。

本論文は木村の発見した「来歴拒否症候群」の理論の要約的介绍と筆者の理解を展開したものである。

まず典型的ではないがどこにでもあると思われる例をここにあげる。

## 事例 G

いまだによく覚えている記憶があります。私が小学校3年の時、暖かい春休み近くの土手で花摘みの一人遊びをしていたら、白い自動車が私と30メートルも離れていないところに近付いてきました。不信に思って振り返るとその車の後部席にのっていた40才位の女性が窓から身を乗り出して「ひとみちゃん、ひとみちゃん」と叫ぶではありませんか。またその隣にのっていた私より年下と思われる男の子が「おねえちゃん、おねえちゃん」とやはり叫びました。運転席には男の人が乗っていました。私は呆然として立ち上がり、本当に心の底から恐ろしくなってなぜだか涙が止らず一目散に家の方へ駆けだしました。

私は日頃から親に「おまえはもらいっ子だ」の「捨て子だ」のと言われていたため「本当だったんだ!」と目の前が真っ暗になりました。家につくとすぐ母にいまあったことを打ち明け「本当は私『ひとみ』って言うんでしょ。違う人の子供でしょ」と泣きじゃくりながら言いました。母もこれはたいへんだと思ったらしく、へその緒や母子手帳を持ってきて私に見せたが、私が納得しなかったため「じゃあ今から土手に一緒に言って母さんが白黒つけてあげる」と真剣な顔で言ったため私はなぜか安心して「わかったよ私はやっぱり母さんの子だね」と言ってその場はおさまりました。

しかし、あれ以来も「捨て子」と言われました。高校入試の時取り寄せた戸籍はしっかり母さんの長女となっていました。<sup>1)</sup>

最近、臨床心理学での世界で影響力の大きいメラニー・クラインの対象関係論の文献を調べて行くと、「もらい子妄想」は子どもの母子関係と関係している事も分ってきた。さらに、心理療法の実践的な理論からは「転移・逆転移」の問題とも関係する事が分った。つまり、治療者または来談者に来談者または治療者が「見捨てられる」と言う心理とも関係するのである。<sup>2)</sup>

ところで、「もらい子妄想」の命名者である木村は、この研究の意義を次の様に主張している。

「比較的多くの子どもが、児童期から思春期にかけてのある期間、これと同じ内容の空想を抱くことはよく知られている。(略)ところが、成人の精神病者においてこの空想が病的に強い確信を帯びた妄想として長期間持続しうることについては、これまでから我が国ではよく知られていながら、これに対するまとまった研究もなく、この妄想を現す特別の名称もつくられていなかった。その原因は、実はこの妄想が欧米諸国にはほとんど出現しない独特の妄想であり、したがって従来の欧米の教科書に全く記載されていないばかりか、これに対する特別の研究も発表されていないということにあるらしい。従来から欧米一辺倒の我が国の精神医学においては、欧米に於いて問題にされていない現象が一般の関心を引く事は、きわめて稀なのである」<sup>3)</sup>

従って、このテーマは、きわめて日本的現象であるために、精神医学でとりあげられることもなく、また心理学の世界でもとりあげられることはなかった。しかし、最近の国際化のなかで日本人の在り方が、経済のみならず、教育とのかかわりで問われる中で、注目されつつある。

## I 概念の定義

「もらい子妄想」の提唱者である木村によると、「もらい子妄想」の性格とは次の様に定義つけられると言う。<sup>4)</sup>

「もらい子妄想」症状とは、一般的に表現するならば患者が自分の両親あるいはその一方を、実の親ではないと主張する妄想症状である。

この種患者については「自分は小さい時に拾われてきたのだ」とか「親戚から養子にもらわれたのだ」とか「不義の子だったのがひきとられたのだ」とか「実の親が死亡してその後に継父や継母が入ったのだ」とか、様々な表現がとられるが「現在の親が生みの親でない」とする点はいずれも共通しており、それ故にもっとも一般的なもらい子という表現を使う。

### ① 血統妄想との相違点

「真の親の否定」は、西洋でも昔からよく知られている「血統妄想」<sup>5)</sup>と一見よく似ている。例えば、「自分は元来皇帝の申し子であって、事情有って現在の親に養われているだけだ」と架空のあるいは実際の社会的地位の高い人物を真実の親にみたてる妄想である。しかし、「もらい子妄想」と「血統妄想」とは親を問題にする点は同一であるが他に大変違った点を有している。以下に分り易いように整理してみる。

1. 「血統妄想」のほうは「自分の親が今の親とは別人である、自分は今の家族とは別の家庭の出である」というポジティブな主張が一次的であるのに対して、「もらい子妄想」では逆に、「現在の親が実の親でない」というネガティブな主張が一次的で「真の親は別にいる」という主張は二次的である。つまり「血統妄想」では自分が特定の血統に属していることが確信されるのに対して、「もらい子妄想」では自分が現在の家族に属していないことが確信される。
2. 「血統妄想」というのは、一種の誇大妄想であって、自分が属していると主張される血統というのは、決まって皇族、著名人、金持ちなどのような名門である。これにたいして、「もらい子妄想」は、一次的には誇大妄想であるとは限らない。あるいは、むしろ自分は貧しい家の子だと言った卑小妄想的な設定の行われることすらある。

3. 「血統妄想」はこのように高貴の血統や名門の出が強調される妄想であるから、そのような血統の社会的意義が失われている現代にあっては、すでにある程度過去の遺物に化しつつある。

## ② 恋愛妄想との類似点

「もらい子妄想」は、他のいくつかの特徴的な症状と結合して、一定の症状群を形成するのが普通である。親の変りに現在の配偶者を否定するのが「恋愛妄想」である。

de Clerambault (クレランボウ) 症候群<sup>6)</sup>として現れるのが、「恋愛妄想」と言われる。クレランボウによると、「恋愛妄想」は「希望の時期」「怨恨の時期」「憎悪の時期」の3段階を経過すると言う。恋愛妄想患者が相手から期待する愛の実現を得られない時は、まず相手の不実に対して怨恨を抱き、これが次第に憎悪の感情にまで高まる。「恋愛妄想」では、配偶者が否定の対象になる事が多い。たとえば、自分の夫に不満を持つ女性を考えてみよう。現在の自分の夫は当然の事ながら「自分の求めている夫ではない」と言う事になる。言いかえると「現在の夫は真の夫ではない」よって「私にふさわしい夫は別に存在する」と考え、たまたまめぐりあったある男性に恋愛感情を持って「自分の美德のすべてと自分の配偶者たるにふさわしい美德をすべて投影してその男性の人物像を構成する」と、「これこそ真の夫である」と言う事になる。

ここまでは、離婚の問題に係わる多くの人が考えるところかもしれない。しかし、よく考えてみると「美德をすべて投影」は現実的根拠の無い「妄想」と言える。真の夫ではない現在の夫を、「美德のすべての投影」とまったく裏返しの「悪徳のすべての投影」をして「うじ虫」などと恋愛妄想患者は否定するわけである。<sup>7)</sup>

## ③ 人物重複との類似点

「人物重複」の現象は、急性状態の意識障害にしばしば出現する。筆者は、自

殺未遂で救出された後の患者と脳炎の昏睡状態からの回復患者に人物誤認の有る事を自ら体験した。

しかし、この意識障害による人物誤認による「人物重複」と「もらい子妄想」類似の人物重複とは異なり、その人物重複とは、熟知している人物が瓜ふたつの別人に変わったと言う「替え玉妄想 (delire des sosies)」または「Capgras (カプグラ) 症候群」や一人の既知の人物が複数の人物に変装して出現すると言う「Fregoli の錯覚」または「変装妄想」を言う。例えば、筆者のクライアントで人物重複体験を訴えた典型的なケースをここに紹介する。

「私が3才の時、下のきょうだいを産むために、母親は病院に出かけてしまい、私を実家の親に預けて1週間帰ってこなかった。1週間後、自分より大事そうにして赤ん坊を抱えて帰ってきた母親を見た瞬間、お母さんとは思えなかった。接近する母親を拒否して虚空に向って『お母さん!!』と突然、泣き叫んだ。母と周囲の人達の驚きは大変なものだった。私は、誰か私の知らない人が変装して母の姿をしてやってきたのだと思いました」

これは単なる知覚心理学的な錯覚の現象でもなく、精神分析で言うところの転移の問題でも十分説明できないところがある。精神分析で言うところの転移とは、自分の中の無意識的な母親イメージがカウンセラーなどに転移する事を言う。その為あたかもその人を自分の母親の様にして振る舞う事を言う。いわば、未知の人を既知の人と見誤る事であるが、ここで問題にしている「もらい子妄想」と類似した心的メカニズムが働いていると考えらる人物重複のケースは、その逆で、既知の人を未知の人として見誤る事を言うわけで、既知の人（このケースの場合は母親）の否定がその心理的メカニズムに存在している点では、現れ方は異なるけれども、「もらい子妄想」と類似点がある。

以上4つの現象をまとめて来歴否認症候群と呼ぶ。その相違点を明確にしながらか典型的な表になる工夫を入れて整理してみると以下の表のようになる。

表1 もらい子とその類似現象との相異点

来歴否認症候群	否定の対象	肯定の対象	時間	西洋	日本
1. もらい子妄想	親	×	過去	×	○
2. 血統妄想	親	○	過去	○	×
3. 恋愛妄想	配偶者等	○	未来	○	△
4. 人物重複（転換・変装）妄想	親等	△	現在	○	△

## II 家族来歴拒否症候群の臨床像

なぜ自分の親を否定するのか。まずそのことを明らかにするために木村が例示している「もらい子妄想」の2人の患者の臨床像を筆者が整理して以下に引用する。

### ①症例 M

自分がなんであるのかが自分でもわからない。壁にぶつかっているみたいだ。父や母に対して何かしらけた感じがする。話のもっていきようのない感じだ。奇跡でも起らぬかぎり、自分は変りようがない。子どもの頃から本当の母を探していたように思う。探しあぐねて疲れてしまった。母に叱られたりした時、甘えたい気持ちがあったのに甘えられなかった。ぼくの考えていることと母の気持ちがいっしょだったらいいのに、と思っていた。小学生の頃から女の子は嫌だった。中学生の頃は女の子が徹底的に嫌で、女の子がそばにいとまるで氷柱のそばにいるような気がした。(略)

中学3年の時、成績が下がって親に叱られた。このころ、本当の親に別れたのだ、母は継母だという意識がいよいよ強くなってきた。(略)

京都の病院に入院していた時、院内のフォークダンスで身体に触れ合ったある女性をお母さんだと思うようになった。その人と自分とは同じ血が流れて

いるという感じがした。そしたら急に、その人は女優のKだと思えてきて、だから、Kがぼくのお母さんなのだという事が分った。そしてぼくには父というものがなく、キリストの様に母だけから生まれてきて、世界に1つしかない血筋なのだった。もしぼくに父があったとしたら、それは不動明王だと思った。それから、テレビに出てくるいろいろな女優とぼくとの間には夫婦関係があって、子どももできていると思った。その女優たちはテレビに出てくると、ぼくに対して、愛しているという意思表示をする。特定のどの女優ということではなく、いろいろな女優がぼくを愛してぼくの子どもを産んでいると思った。<sup>8)</sup>

## ②症例 O

ぼくは以前タナカの姓だったはずなのに、いつのまにかオクダ（患者の実名）に変わった。なぜ変ったのか知らないが、籍が変えられたのだということを人づてに聞いた。タナカというのは父方の祖母の実家の姓。しかし、ぼくは実はタナカの姓でもないらしい。本当のところはハタノの子らしい。（略）

家の近所にタキガワという酒屋があって、そこに一人娘がいる。この子とぼくとは幼なじみで、むかしからちょっと好きだった。去年の9月ころからハタノのお婆さんが、ぼくに直接にはではなく、近所の時計屋のおやじを通して遠回しに、その娘との縁談をもってきた。しかし、その娘は一人娘だから、ぼくのほうからタキガワへ養子に行ったら酒屋の後を継ぐのでなければ結婚できないはずだ。（略）

タキガワの娘との縁談についてぼくが態度をはっきりさせることができずにいる間に、彼女は去年の秋に他の男と結婚してしまった。ところがハタノの家では、ぼくがタキガワへ養子に行かなかったのを恨んで、それ以来いろいろとイチャモンをつけるようになった。<sup>9)</sup>



### ③症例 Mの解釈

症例Mについて、女性との愛のテーマについての展開を整理してみると次のようになる。

Mは、母親に対して甘えたくても甘えられない関係にあった。中学3年生の時より、実の両親とは別れてしまっていて、今居る母親は継母に過ぎないという妄想を持ち続けてきた。女の子がそばにいと「まるで氷柱のそばにいとるよう」であるという。身近に居る女性と係わることのできないMの心理は、小さい頃から甘えられなかった現実の母に対する感情転移であると考えられる。

ところが、周りの女性は「氷柱」だと思っていたのに、偶然フォークダンスである女性と肌が触れ合う。その瞬間Mはその女性を「女優のKだ」「本当のお母さんだ」と思うようになる。Mは、女優たちが「愛しているという意思表示」をし、女優たちと「夫婦関係があって、子どももできている」という妄想を持つようになるのである。

問題はMの「母親的なもの」は何を意味しているかという事である。母親に対して「甘えたくても甘えられない」ということは、母親に問題が無ければ、Mが自分の方から積極的に母親の愛を求める事をしなかったという事を意味する。Mを治療していた木村はMの受け身的性格を問題にする。母親だけでなく、Mは女性一般に対しても、男性として、能動的に、女性を愛する事をしなかった。Mが自分の方から積極的に愛情関係を切り開かないかぎり、Mに対して愛を表現しない一般の女性は冷たい「氷柱」でしかないわけである。Mは、相手からの意思表示を受け身的に待つという基本的態度を保持しているため、女優たちが視聴者に向かって示す積極的な愛の表現は実に効果的な影響をMの心に及ぼす。そのため女優たちの愛の訴えは、時間空間的な次元を飛び越してMに対して「本当の母親」のイメージを転移させる。そこにMの妄想の心理的メカニズムが存在する。<sup>10)</sup>

#### ④症例 O の解釈

症例Oの妄想については、酒屋の一人娘に対する恋心からスタートしていることは明らかである。木村によると、Oは建具師の父親の長男として生まれており、父の職業を継がなければならないという立場にある。したがってOが、酒屋の一人娘に惚れたからといって養子として婿入りする事は不可能である。したがって、Oの「もらい子妄想」は、自分の戸籍を否認し、自分をもらい子とすることによって、Oは自らの来歴に事後的改変を行い、それによって現在の意味を変えて、酒屋への婿入りという将来を可能にしようと意図したものである事が了解できる。妄想の心理的機能は、「現実の不可能を非現実の可能に変える」ことである。<sup>11)</sup>

### Ⅲ 「もらい子妄想」の病因論

#### ① 来歴とは

私は今の一瞬に忽然と派生したものではなく、かくかくの家に生まれ、かくかくの親に育てられ、かくかくの家族や友人と交わり、かくかくの相手と結婚したところの私である。私を現在の私たらしめているもろもろの要因は、時間的観点からみるならばすべて過去の事件であり、たんなる追想の対象でしかない。しかし、これらの一連の「過去の事件」は、つねにそのつど現在における私の在り方に決定的な作用を及ぼし続け、現在の私の自覚内容を規定しつづけている。このようにして自覚における現在に対して規定的に働いている過去の総体を、われわれは「来歴」の名で呼んだのである。

現在における私の自分のありかたは、そのまま将来に向かって私の可能性の方向を意味する。自分の歴史性における将来とは、現在の意味地平がふくんでいる可能性の自覚の総体にほかならない。来歴が現在の自覚内容を決定するということは、来歴が将来への可能性をも自覺的に限定するということの意味し

ている。

上述した2つの事例は、いずれも現在の在り方に反抗し、現在の地平のなかには含まれていない将来の可能性をもとめていた。Mは「女性を愛する事が出来ない」という現実の在り方に逆らって「女性から愛されたい」という願望を抱いた。Oは「世襲職業の家の長男」という現実逆らって「一人娘のもとに婿入りしたい」という願望を抱いた。

いずれも、現実には実現不可能な願望を実現し得る可能性を彼等の現実の中に持込むために、彼等の来歴に妄想的改変を加えなくてはならなかったのである。彼等は、自分たちの願望にとって制約的な現実の直接の原因となっている過去の特定の出来事のみを目を向けてこれに妄想的改変を加えるのではなく、むしろ彼等の出生時にまでさかのぼって、あるいは出生以前の血統を問題にするという形で、来歴の全面的な改変を試みて居る事は注目に値する。これは、来歴というものが決して過去の個々の事件の加算的総和ではなく、一つの全体として現在の地平の中へ意味的に関与していることを示すものである。

## ② 来歴の妄想的改変

来歴が全面的に改変されて現在が新しい意味内容を持ったという事は、自分の在り方が変化したという事である。

自分とは決して実体的な「もの」ではなく、自分が「自分ならざるもの」と直接に出会っている時に、その出会いの生じている場所において「自分ならざるもの」の側からいわば触発された形で自覚される「こと」なのである。対人関係についていうならば、自分と他者が出会っている時、この出会いという事態によって、「自分ということ」および「他者ということ」がはじめて成立するのである。<sup>12)</sup>

よって、来歴の妄想的改変によって自分の意味内容が変化するという場合、そこにはつねに、必然的に、他者の意味内容の変化も生じてなくてはならな

い。この場合の「他者」とは、任意の他者一般のことではない。自分がその他者に相向かった出会いの場所としての現在において、その他者にかかわる将来の可能性を変更させるために自らの来歴を変更せねばならなかった。その他者の自分に対する意味内容を変えるために、自分の来歴を変えるのだといってもよい。

### ③ 受動的愛情欲求

症例Mの解釈のところで触れたように、「もらい子妄想」という来歴の意味改変で重要な役割を演じているのが「受動的な愛情欲求」であった。「受動的」という言い方に不満をもたれる人が居るかもしれない。MにしてもOにしても、彼等の愛を成就する事にむしろ積極的、能動的であったからこそ、現実の制約を突破しても妄想の世界のなかにまで愛の主題を持込んだのではないか。

この事をはっきりさせるために、筆者は「もらい子妄想と愛の関係性」について表の2を作成した。この表の2を見ても分るように、そう言える側面はあるように思われる。つまり、愛のテーマのうち「他人から愛されることに積極的」であると言う事である。もらい子妄想の患者であるMとかOの「受動的な愛情表現」というのは、いいかえると、「自分が他人を愛することの消極性」なのである。したがって、彼等は一方的に相手から「受動的」に愛されたい欲求のみを異常な「積極性」をもって貫徹しようとしたのである。

以上は、自分と他人との愛の関係について述べたが、自分と自分との愛の関係性についてはどうだろうか。一般に、精神分析ではこの問題は「ナルシシズム」を意味するものとして議論されている。ナルシシズムは自己愛と日本語に訳される。わかりやすいようにまた、表2より判断すると、ナルシシズムとは、自分が自分によって愛されたいということであり、表2でいうと「自分→自分」の「愛される」欄が肯定的になる事を意味している。ナルシシズムは徹底的な自己愛で他者との関係は入ってこないのも、もらい子の場合はナルシシズム論で行くと「自分→他人」「他人→自分」の「消極的」「積極的」要因とそれに加

えて強い自分の来歴拒否つまり「自分→自分」の否定的要因が含まれている。したがって、もらい子妄想の愛の性格は、受動的他者関係的ナルシズムと言えるかもしれない。つまり、もらい子妄想は、「自分が自分を愛する事が出来ず、しかも、自分自身によって愛されようとする要求のみが自分の在り方を支配した時に出現する」のである。<sup>13)</sup>

表2 もらい子妄想と愛の関係性と性格

	自分→他人	自分←他人	自分→自分	自分←自分	愛の性格
愛する	消極的		否定的		
愛される		積極的		肯定的	受動的

#### IV 「もらい子」妄想と日本文化

最後に、なぜ日本人が「もらい子」という来歴拒否の態度を取るのかという問題を明らかにせねばならない。日本人の「受動的愛情表現」について筆者はすでに「しつけ」「もらい子」「別れ空想」などの幾つか論文で書いた。<sup>14)15)</sup> ここでは、自分の来歴拒否がなぜ家の拒否になるのかということに焦点をあてて議論する。

##### ①「家」と「間」

日本人の自我意識と家族意識とは欧米人に比較して特異な関係にある。その関係とは、日本人の自我が家族と言う場所においてある在り方の特異性をいう。

個人の血縁史的アイデンティティの成立する場所は、家族内における自分と他人との間、つまり先ず第一に自分と親との間、自分ときょうだいとの間、そして更に自分と夫、自分と妻との間、自分と子供との間でなくてはならない。これらの自分と家族との間の場所のことを、日本語では「家」という。

この日本人のアイデンティティの特異性は、結婚という現象の意味内容と形態の差にも反映している。西洋では、結婚は一人の男と一人の女とが神の前で互いに誓いを交わすことによって成立するのに対して、日本の結婚は、家と家との結婚である。

「一人の男が自らの自分を見出している人と人との間がそこにおいてある場所としての一つの家」と「一人の女が自らの自分を見出している人と人との間がそこにおいてある場所としての一つの家」とが結びついて「家族付き合い」の範囲が拡大し、その成因である一人一人の個人が、より広い間柄において自分を見出し始めることを意味する。日本の結婚の場合、人と人とが結びつくのではなく、間と間とが融合するのであるから、そこでは、夫あるいは妻の一方が死亡しても、夫と妻が個と個の関係で結びついていないので、結婚の事実は解消されない。なぜなら、「間において自分を見出す」という自我の在り方は「家」がある限り、「〇〇太郎」とか「〇〇花子」ではなく「～の夫」「～の妻」という「間」で生き続けるからである。つまり日本人のアイデンティティはそこにあるということである。<sup>16)</sup>

## ② 家と住居

ドイツで住む日本人が、理解しにくいのはドイツ人が「家」Haus（ハウス）の概念と、「住居」Wohnung（ヴォーヌング）の概念とをはっきり使い分けていることである。ハウスというのは一つの独立した建築物の全体を指し、ヴォーヌングというのは人の生活単位としての居住空間を指している。

だからかなりの富豪とか農家とかでは一つのハウスがそのまま一つのヴォーヌングをなしていることもあるけれども、都会の大多数のハウスはその中に数単位のヴォーヌングを含んでおり、だいたいそれだけの数の家族がそれぞれのヴォーヌングに生活している。西洋の居住空間において、屋外の道路と言う公開の場とは本質的に異なった私的空間といえ、厳密にはこの個室だけである。これに対して日本の住宅においては、一戸建ちの家はもちろんのこと、ア

パートやマンションにおいてすら、玄関の内と外とが私的空間と公的空間を区別するようにできている。この区別は、帽子や外套や靴を脱ぐという行為によって実現される区別でもある。

西洋の家屋において、各室が鍵で密閉されているということは、その他の部屋のそれぞれが独立した私的空間即ち「家」たりうることを意味している。日本の家はこのように外なる街頭からはっきり区別された「内」であるけれども、その内部における各個室は独立性を全く有していない。

ヨーロッパのカフェは茶の間であり、往来は廊下である。この点から言えば、街全体が一つの家になる。鍵を持って個人が社会から己を隔てる一つの関門を出れば、そこには、共同の食堂、共同の茶の間、共同の書斎、共同の庭がある。しからば、廊下は往来であり、往来は廊下である。と言う事は家の意味が一方では個人の私室にまで縮小され、他方では街全体に押し広げられると言う事に他ならない。それはつまり家の意味が消失したと言う事である。家が無くして、ただ個人と社会とが在ると言う事である。ところが日本でこうした、町並みが作られないのは経済的の力がないからではなく、ただ共同的に、また公共的に都市が営まれないからに他ならない。では何故日本人は共同的に公共的に都市を営もうとしないのであろうか。その理由は日本の家に現れている。

日本には明かに家がある。廊下は往来となることはなく、その関門としての玄関は、そこで廊下と往来の別、内と外の別を立てている。日本人はこのような家に住む事を欲し、そこでのみくつろぎを得る。日本人は、家にあれば、己と他との間にへだてがない。共同的であることがちょうど日本人を最も不安ならしめるのである。日本人が、公共の問題をおのが問題として関心しないためである。しかし、西洋人は公共的なものへの強い関心関与とともに自己の主張の尊重が発達した。日本人の関心は、家の内部の生活を豊富にしうることのみに掛かっている。<sup>17)</sup>

つまり、和辻によると日本の家は、外に向かって閉じているが、内に向かっ

ては開かれているというのである。内の中にし切りが無く、個室が存在しないと言う事である。

### ③ 日本人の「家」所属性

「自分の部屋」と言う言い方には他の部屋との間に何か具体的な心理的隔てがあることに気づく。私の、小学生、中学生と高校生の個室に関する調査によると、調査対象になった子供たちは、思春期の一時期を除いて親との心理的隔てをたてない。その時期でさえ、自室の掃除は母親がしている。また個室を作ってもそれを活用しないで、いつも茶の間で過している子どもがいる。このように、日本の家には西洋的な意味での個室がないということは、家の中では隔てをたてないと言う、言い換えると、家族は一体で融合しているという個人の自我意識とも深い関係を有している。したがって、日本の家族が、それぞれ「自分の存在を最も良く発見する」のは、だれの部屋でもない上述したように「茶の間」においてである。人と人との間がそれぞれの自分に分有される場所、それが「間」としての部屋である。日本の家には、個人に存在の根拠を与える場所としての個室はなくて、人と人との間が、自在に自分を実現していく「間」だけがある。つまり、西洋人が個人として社会に関与するのに対して、日本人は家の一員として社会に関与する。言い換えると、日本人は、私的な自分を守って「家」所属性において見出すということになる。

このようにして、自分を第一義的に「家」所属性において見出す日本人にあっては、精神病的な状態において自分の現在の在り方を妄想的に根本から否認し、現在の自分ではない別の自分であろうと欲する場合には、自分の「家」所属性がまず以て否認されなくてはならなくなる。自分が普段自分を自分として見出している場所としての「家」が、根本から別の者に変更されなくてはならなくなる。これが「もらい子妄想」に他ならない。

人間共通の精神病的自己否認の機制において、日本人だけが、自分の「家」所属性を問題にし、それに根本的改変を加える必要性を有しているということ



である。「もらい子妄想」が日本特有の症状であるという事実は、日本人の自我意識がいかに強く家意識と結びついているかを物語るものであろう。

#### 引 用 文 献

- 1) 山添 正 物語法による現代日本の子供学入門 84頁 ブレーン出版 1993年
- 2) 織田 尚生 昔話と夢分析 211～224頁 創元社 1993年
- 3) 木村 敏 自覚の精神病理 74頁 紀伊國屋書店 1978年
- 4) 木村 敏 人と人との間 203頁 弘文堂 1980年
- 5) 木村 敏 前掲書 204～206頁
- 6) Clerambault, G de Ouvre Psychiatrique PUF Paris, 1942年
- 7) 木村 敏 自覚の精神病理 96頁 紀伊國屋書店 1978年
- 8) 木村 敏 前掲書 72～73頁
- 9) 木村 敏 前掲書 79～81頁
- 10) 木村 敏 前掲書 75～76頁
- 11) 木村 敏 前掲書 83頁
- 12) 木村 敏 前掲書 131頁
- 13) 木村 敏 前掲書 135～136頁
- 14) 山添 正 日本人の愛情表現 724～725頁 小児看護 第16巻 6号 1993年
- 15) 山添 正 物語法による現代日本の子供学入門 60～86頁 ブレーン出版 1993年
- 16) 木村 敏 人と人との間 210～213頁 弘文堂 1984年
- 17) 和辻哲郎 風土 187～202頁 岩波書店 1979年
- 18) 木村 敏 人と人との間 217～219頁 弘文堂 1984年